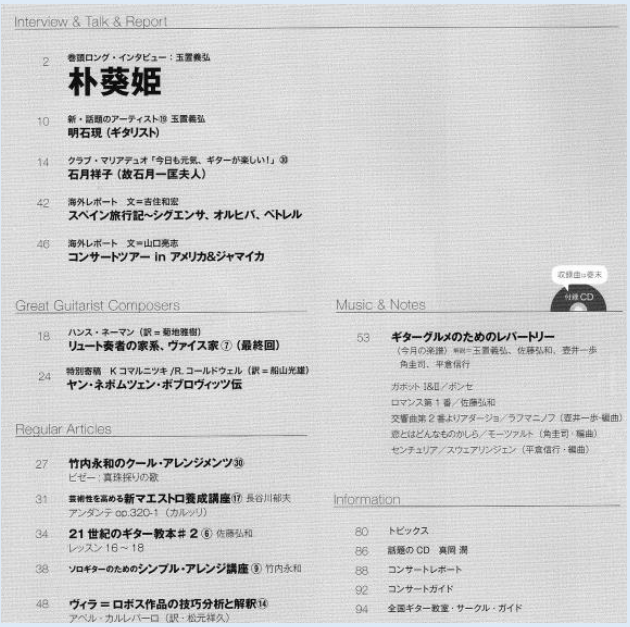
Guitar dream　NO.30(2011. 9)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　朴蔡姫

私の中では一番可憐な演奏をするギタリスト思っている朴さんのインタビュー記事です。韓国で生まれ、3歳の時に日本に。その後 5 歳の時に韓国に戻って 10 年後また日本に。現在は（インタビュー当時)、両親が日本の永住権を持つことになり日本住まいに。ということで、日本人以上に日本的なところがあるのかな。

- 韓国では、山下和仁さん、福田進一先生、稲垣稔さんの 3 人がギターの神様になっています。
- ロマン派の曲が好きです。私には、「音楽は美しいもの」という考えが強くあります。だから、現代曲でも、どうしても美しく演奏したいと思ってしまう。メロディーのない現代曲のような曲は苦手ですね。
- 韓国のギター会は日本より狭いのでみんな知り合いは多いですね。中学の先輩や後輩だったり。
- 両親が日本の永住権を取得できたので、これからは何の制限もなく日本人と同じ生活ができるので、すごく喜んでいます。
- 映画が好きで、日本の映画も好きです。「ラヴレター」「メゾン・ド・ヒミコ」も面白かったです。
- ビールも好きです。ヨーロッパでビールが好きになって、家でゆっくり飲んでいます。

【(新)話題のアーティスト紹介　明石　現】

映画、舞台音楽を担当しているギタリストだそうです。大学の講師として「現代社会論」を担当しているそうな。現在、NPO を立ち上げて、「芸術を教育・福祉に」プロジェクトを展開中ということです。

- 今展開している「歌物語」は、芸術を通して、人として生きていくのにどういうことが大切なのかを問いかけるものです。
- 留学中にルーマニアに行き、独裁政権が人々を苦しめている状況を見て、ギターだけでなく社会に目が行く切っ掛けになったようです。大学の「現代社会論」では、「エル・システマ」や、戦争カメラマンのように、一つの職業のバックに哲学があって、それを信念に活動している人について語っています。「社会派ギタリスト」とよばれることは嫌でないし、そうありたいと思っています。
- 草間彌生が、「芸術はわかりやすく、直ぐ結果が出るものではない。でも、与える側が全人格を注いで、人の心の深いところにタッチして世の中を変えたり、人間の本質の優しいところに働きかけることで、それが平和につながっていく」といいました。自分が渦を起こすことができなくても、その大きな円の弧の一部になれればいいのではないかと思っています。

【クラブ・マリアデュオのインタビュー：石月祥子】

ギタリスト石月一氏（亡）の奥様です。旦那さんの遺稿（作曲した曲）の楽譜出版をやっているそうです。

- 結婚指輪の代りに、ギターを選んで買ったもらいました。
- 彼の生活は、レントかアダージョ的で、体をほぐして爪の手入れをして、ゆっくり昼頃に朝食に出てくるような感じでした。でも時々、ビヴァーチェになる時があって、思い立ったら車で長野まで葛切りを食べに行ったりしていました。
- 遺稿には楽譜以外のメモもあって、「狂うほど弾いたがこのギターは全くいい音がしない」というのもあり、彼のギターの音に対するこだわりがよく伝わってきます。

【新　マエストロ養成講座　第16回】

今回は、カルカッシのカルッリのアンダンテ OP320-1 です。

【その他の注目すべき記事】

- 「21 世紀のギター教本＃２：佐藤弘和」：今回は、トニック、ドミナント、サブドミナントについての話です。加えて、非和声音についての解説もあります。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：今回は、ビゼーの「真珠とりのタンゴ」です。
- 「ソロギターのためのシンプル・アレンジ講座：竹内永和」：6th、9th、11th コードの解説です。サンプル曲として、アイルランド民謡の「ロンドンデリーの歌」が掲載されています。

「カルレバーロによるヴィラ・ロボス解説」「リュート奏者、ヴァイス家」「ヤン・ネポムツェン・ボブロヴィッツ伝（２)」「スペイン旅行記」等もあります。多少、内容が持ち直してきている気配は感じられますが。(朴さんのインタビュー記事のおかげか？)

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下の楽曲が掲載されている。

ギターグルメのためのレパートリー

付録CDに
模範演奏が
収録されています。

マヌエル・M・ポンセ

ガボットⅠ&Ⅱ（組曲ニ長調より）

《組曲ニ長調》は 1931 年に書かれ《古風な組曲》の名前でも知られているが、当初はアレッサンドロ・スカルラッティの作曲としてアンドレス・セゴビアにより演奏された。これはギターのレパートリーを増やそうと考えたセゴビアがポンセを巻き込んでの捏造で、ほかにも《イ短調組曲》がシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスの名で発表されている。今回の掲載にあたって、現在の出版譜での明らかな誤りを訂正した。

（玉置義弘）

セルゲイ・ラフマニノフ（壺井一歩・編曲）

交響曲第 2 番よりアダージョ

優れたピアニストでもあったラフマニノフには、そのヴィルトゥオーゾぶりを示す多くのピアノ作品がありますが、ロマンチックな旋律と憂愁を帯びたハーモニーで、映画音楽などにもよく用いられてきました。有名なところでは《ピアノ協奏曲第 2 番》や《ヴォカリーズ》（4 重奏アレンジが本誌 No.9 に掲載）といった作品がありますが、この《交響曲第 2 番》の第 3 楽章も近年人気の高い作品です。延々と続く 3 連符の内声が、この作品を格調高いものにしていると思います。

紙面の都合で中間部とコーダの一部を省略してあります。

（壺井一歩）

佐藤弘和

ロマンス第 1 番

「ロマンス」というとシューマンのオーボエとピアノのための《3 つのロマンス op.94》などが思い出されますが、ギターでは何と言っても《愛のロマンス》でしょう。そういうわけで、出だしはこの《愛のロマンス》にならって 7 フレットのシの音から始まります。Em のコードですが、全体のキーはホ短調ではなくニ長調。

《愛のロマンス》風なアルペジオに乗ってメロディが歌われるパターンで曲が進みますが、途中でアルペジオが中断し、第 2 主題的な扱いのリズミカルな和音のテーマが出てきます。その部分を中間部と見ると、全体は複合 3 部形式と言えるでしょう。冒頭のテーマに戻ってきた時には、必ず最初の雰囲気を思い出すようにしてください。

この曲はずいぶん前に書いてそのままにしていたのですが、今回少し見直して仕上げました。でも、根本的には大きな変更は加えていません。「第 1 番」としたのは、今後「第 2 番」も作ろうかなぁ…と考えているからです。

（佐藤弘和）

W・A・モーツァルト（角圭司・編曲）

恋とはどんなものかしら

歌劇《フィガロの結婚》より《恋とはどんなものかしら》です。比較的わかりやすいラインのメロディーですが、アポヤンドを多用しすぎて全体的に重くなり過ぎないようにしましょう。とくに 12 フレットよりもハイポジションの音では、左手を強く押さえたり、右手をアポヤンドで強く弾き過ぎたりすると、かえって音が詰まってしまうことがあります。軽やかに歌っていくと、曲の本来の雰囲気も出しやすいと思います。

（角圭司）

ジェイムズ・スウェアリンジェン（平倉信行・編曲）

センチュリア

ギタリストにはあまりなじみのない曲かもしれません。私も娘の参加している吹奏楽で初めて知りました。明るく元気な部分としっとりと歌わせる部分が相まって、弾きごたえも聴きばえも十分な曲です。奏法的にいくつか特殊なものがあるので説明しておきます。まず⑥ですが、4th のベースの連続は親指の爪をピックのように使い、ダウン・アップのピッキングで弾きます。D.S. 前 6 小節⑦で L.T. と書いてあるのはレフト・ハンドの意味で、左手で⑤⑥弦の 5 フレットを叩くようにして押さえて音を出し、その指で弦をひっかくようにしてスラーをします。続く T.H. はタッピング・ハーモニックスで、右手の指先で⑤⑥弦の 12 フレットあたりを叩き、ハーモニックスと打撃音を同時に出します。リズムを大事にしてください。全体的な注意としては、テンポ・チェンジが頻繁に行なわれるので、全員で rit、a tempo のイメージを合わせるようにしましょう。発想記号のない所も、メロディーの音高に合わせ十分に歌うようにしましょう。

（平倉信行）